

宮崎県の美術史について

前高鍋町美術館館長

石井秀隣

# 目次

はじめに

宮崎に関連した画家たち

〔児島虎次郎〕

〔岩尾信夫〕

〔辻野精一〕

〔有田四郎〕

〔野口徳次〕

〔太佐豊春〕

〔塩月桃甫〕

〔吉加江京司〕

〔仲矢勝好〕

〔山田新一〕

〔瑛九〕

〔杉下昭明〕

〔古川重明〕

〔平原美夫〕

〔道北昭介〕

〔サイタ亨〕

〔小野彦三郎〕

〔上村次敏〕

〔新原峻吉〕

〔井上自助〕

〔坂本正直〕

〔出水勝利〕

〔宮崎正二〕

〔鳥原茂之〕

〔長谷場三夫〕

〔河野扶〕

〔川越彌録〕

〔末原晴人〕

〔松井富民夫〕

〔彌勒祐徳〕

〔黒木貞雄〕

〔雨田正〕

〔石井秀隣〕

〔岩下資治〕

〔吉田敏〕

## はじめに

私に与えられた演題が「宮崎県の美術史について」ということです。私は体系づけた宮崎県の美術史を語るほど、専門的に勉強しているわけではありません。

そこで、今回県立美術館が二〇〇七年に開催した「宮崎の洋画一〇〇年展」の時のパンフレットを使い私が交流のあった方たちの作品を見ながら進めていきたいと思えます。

現在の県庁所在地に新幹線も高速道路もないのは我が宮崎県他どこがあるでしょうか。

宮崎県は、その意味でも後進県のように思われます。このことは日向一國を一番で治めるような大名がおらず、その後の政治の中の人材不足、経済力の弱さに繋がったのだという人がいます。

日本の洋画史の変革の局面には、西日本出身の画家たちが登場します。残念ながら宮崎県出身者ではありません。やはり宮崎県には画家を育てるような大スポンサーや表舞台に引き上げることのできる力のある人物がいなかったという事も事実ではなからうかと思えます。しかし、地理的空間の差、情報伝達の時間の差等、現在は昔では考えられない時代になりました。この宮崎からきつと近い将来、歴史に残る作家が輩出することでしょう。

では、宮崎に関連した画家たちを紹介しましょう。

## 宮崎に関連した画家たち

「児島虎次郎」について



「少女像」制作年不明

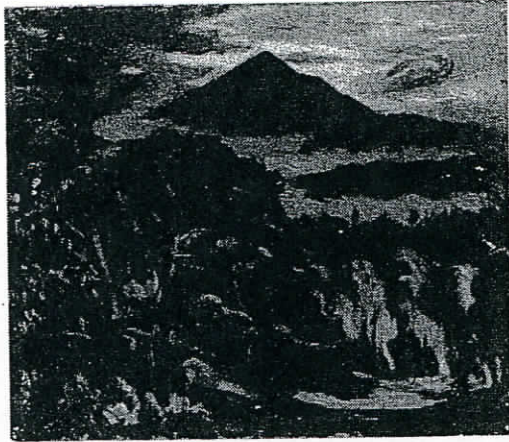
岡山県の出身ですが、孤児の父と謳われる石井十次の長女と結婚されたので、宮崎との縁も深い人です。東京美術学校卒業後、ベルギーの美術学校に留学をしています。今日までこの美術学校を外国人が首席で卒業したのは彼一人だそうです。出身地にその時のデッサンを中心に展示した美術館がありました。実には力強いデッサンです。大原奨学金で勉強したのですが、彼が集めた作品が倉敷の大原美術館の始まりです。児島の目で集めた作品に大原も要求通りの金額を送金したそうで、まさしく素晴らしい人間の出逢いだったと思えます。ちなみに大原は、最初は児島の作品の為の美術館を考えていたそうです。私が生徒であった頃は茶臼原の孤児院には庭先にルノアールの首像が無造作に置いてありました。美術学生の頃、「高鍋に来てごらんよ、ルノアール等は庭先に置いてあるよ」と威張っていたのですが今は立派な台座をつけて室内にあるそうです。私は、その後見ていません。

「有田四郎」について

鎌倉にアトリエを造るのですが「主婦の友」に赤いアトリエとして掲載されると見物人が絶えなかったため、引き払って宮崎に来ま

す。宮崎から「主婦の友」の表紙絵を、毎月送っていたそうです。有島生馬等、白樺派の人達との交流が盛んでした。何故宮崎から「主婦の友」の表紙絵を送るような関係だったのかと思っていたので、娘の楨さんに直接お聞きすると、「主婦の友」の社長さんも白樺派なので、その縁からでしょうということでした。

タヒチにあこがれて、タヒチ行きを考えるのですが、奥様が「宮崎はタヒチぐらい辺地だから、タヒチの代わりに宮崎にしたら」と言われ宮崎にこられたのだそうです。奥様は、高鍋高等女学校の先生をされました。有田四郎は、延岡中学校と宮崎師範学校で教鞭をとりますが（後になって高鍋中学校でも教えている。）多くの人に影響を与えています。後述しますが直接私と関係があるのは河野扶と平原美夫です。



「霊峰霧島」1940（昭和15）

有田四郎は、長身で彫りの深い顔立ちで日本人離れをしていたと言われています。剣道をよくされていたそうです。高鍋の住まいはガラスを多様したモダンな建物で、川南町十文字に牧場を持っていたそうで引き揚げる時に全部無償で小作人に分け与えたとの事です。その時の牧場から描いた絵が延岡高校に保管されています。多

分県内に現存する作品ではそれが一番大きいはずです。

#### 「塩月桃甫」について

台湾美術界の大御所的存在でしたが、敗戦後郷里の三財に引き揚げました。私は、旧制中学校一年生のときに一年間高鍋中学校で教わりました。翌年には、宮崎師範の先生として転勤されました。

先生は禿で頭髪が一部だけ残っていました。それを鬢付けか何かで屏風のように一列に立てておられました。ルバシカのような服を着て、麝香じやくかうのような匂いがして教室中が頭が痛くなるような強烈な



「舞子」1949（昭和24）

香水をつけていました。大変な存在感を持った人物で、私は新任式の模様を鮮明に記憶しています。「日本人は、古来髪の毛は後ろから前に伸ばしていたのだ、それを西洋かぶれして前から後ろに伸ばしている。」と言って壇上でぐるりと一回転されて自分の頭髪を見せられました。それが新任の弁でした。翌日の日向日日新聞は、早速それを取り上げて「某中学の悪童連をあっと言わせた。」という記事になっていました。私の友人が杉の木をヴァーミリオンで真赤に描いて非常に褒められました。今考えるとフォーブ風の強烈な絵を目標として指導していたと思います。

「山田新一」について

これが油絵というような重厚な油絵を描き続けました。美しい色彩と肉厚な絵肌、骨太い画面構成、油彩画の魅力を十分に観る人に伝えてくれます。残念ながら私はお会いする機会はありませんでした。

「古川重明」について

私が教職に就いた頃も御本人も教職におられたので、作品は何枚か見ています。実に丁寧で重厚な水彩画でした。

「サイタ亨」について

熊本県の天草出身です。なぜ西都で医師をされたのかと思つていますが、台湾画壇の塩月桃甫に魅せられて敗戦後台湾から引き揚げる時に塩月の故郷・西都市で開業されたのだそうです。高鍋美術館には彼の代表作をまとめて収蔵しています。非常にモダンで密度の高い水彩画です。

「新原峻吉」について

作品が示すように、野太くおらかで、作品そのもののようなスケールの大きい人物でした。まだ県立美術館がなかった頃に先頭にあつて美術館建設の運動をされたり、県の美術協会設立に寄与されたりするなど、教職にあつても学校教育にとどまらず広く地域に美術を定着しようとした人望のあるリーダーでした。

私の宮崎個展の初日が台風だったことがあります。嵐の中を最初に会場に飛び込んで下さったのが新原さんです。新聞評に「七十点の作品の総合数は約二千八百号で本県としては破天荒の個展」と書いてくださったことがあります。

「出水勝利」について

宮崎師範学校が、宮崎大学になった頃から一貫して美術教育に当

たられたので美術教官としての顔の方が強いようにも思われます。図二の絵が示すように温かみのある人柄で、県内では、彼の指導を受けた教育関係者は大変な数にのぼります。

「長谷場三夫」について

温厚で誠実なお人柄でした。けれん味の無い作品で作品そのままの人柄です。沖縄女子師範学校のとときの生徒の娘さんが歌手の中曽根美樹で彼女を養女にするはずだったんだと言つておられました。大宮高校勤務が長く、ご存知の方も多いと思います。

「末原晴人」について

達者な人で洒落た絵を描いておられました。私が高校の美術教師になった時、末原・岩下・長谷場・野口・松井・雨田・黒木亨といった先生方には大変お世話になったものです。

「黒木貞雄」について

骨太の木版画家です。県内の風物、郷土芸能を主要テーマに作品を作つておられました。印象に残っていることは、東京都立美術館で一緒に過ごした時に、自分は敵地に乗り込むつもりでここに来ると言つておられたことです。平原美夫先生とは宮崎師範の同期生です。平原先生の延岡個展の時に黒木さんがお見えにならないので、私が自宅へ伺つたのですが、その時に、「平原君が三十年野球をやつて遊んでいて、野球を止めたので絵を描いた。自分がこのころに行つたら自分の三十年はなんだったのかという気持ちになるから行かなかつた。」と言われました。

「岩下資治」について

体型と同じくがっちりした絵を描いておられます。県内にいる時の作品はあまり見ていませんが、退職後に上京されてからは花畑や

そこに働く人々の姿を重厚に描き出しておられます。

### 「岩尾信夫」について

自身も小学校の教壇に立たれた経験があり、大変優れた美術教師育成の大学教官でした。先生を慕う教え子は沢山います。講習会とか研究会の講師を気軽に引き受けられる気さくで温厚な方でした。高千穂時代に我が家に一泊してもらいましたが、その夜ビールを飲みすぎて完全にダウンされました。翌日は二日酔いでふらふらでしたが、高千穂小学校で見事な模範授業をされました。

### 「野口徳次」について

人間的に非常に幅広いものを持っておられた方でした。美術学校を出られて新聞社や映画会社に勤められた経験等も関係しておられたのかも知れません。人脈も豊富で特に都城市立美術館を育てられた功績は、大きいと思います。

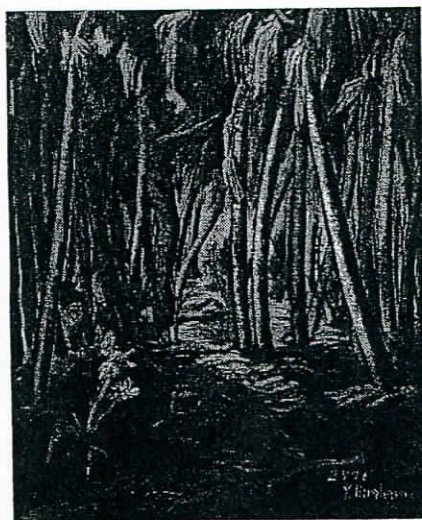
### 「吉加江京司」について

上京されるまでは延岡に居住されていて、私も交流がありました。母子像を良く描いていましたが、それをおして命・社会問題、戦争などを表現したりベラリストでした。

### 「瑛九」について

宮崎県出身洋画家では、全国的に最も知名度の高いと言えます。お会いしたことはありませんが、彼の父親と私の祖父が医者仲間でも近かった関係からか、彼の具象の作品が祖父の家にかかっていました。新しい試みとしてフォト・デッサンを始め、彼の美術理論に共鳴した若手の中から日本画壇の一翼をになう画家が出ています。

### 「平原美夫」について



「ピロー樹」1936 (昭和11)

この作品は、永らく県の教育会館にあったものです。昭和十一年に文展（文部省展覧会今の日展に相当するもの）で宮崎県から洋画で初入選した作品です。非常に描写力に優れた先生で高鍋駅にかけられた尾鈴山の絵は、空が本物のように描いてあると思いました。その絵を見るためにだけに何度も高鍋駅舎まで行った思い出があります。私は随分後まで平原先生ほど絵の上手い人はいないと思っていました。

### 「小野彦三郎」について

お会いしたことはないのですが、大和絵風の作風は好きでした。

### 「井上自助」について

私が学生時代下宿していた家に井上自助の絵がかけてあり、宮崎に帰ってから県内で妻中学校の美術教師をしておられたことを知り親しみを感じています。戦前は中等学校の美術の先生は全国規模の人事交流が行われており、私が教職についた昭和三十二年もたくさんさんの東京美術学校卒の先生がおられました。退職後は、都城の野口徳次先生や宮崎の雨田正先生、それに京都絵専出の黒木亮先生以

外は郷里に帰られるか東京に出られたりしました。

### 「宮崎正二」について

このような子供のような絵は、なかなか描けないものです。日向市を中心に势力的に地域文化向上に取り組まれた人です。宮日展の審査の時にたまたま居合わせたのですが二枚続きのキャンバスを離すなど注意書がしてありました。審査員の山口長男画伯が「これは落書である。落書をしたい欲求はだれにでもあるが、落書は人に見せるものではない」と言われたのが印象的です。

### 「河野 扶」について

私の大先輩です。有田四郎が延岡中学校の美術教師で、河野さんは高鍋中学校の授業が終ると毎日延岡中学校まで有田先生に絵を習いに通われたそうです。東京美術学校を受験されたが不合格で結果として東大の数学に進学されたとのことでした。卒業後大手保険会社に入社されるのですが「こんな楽をしていると絵が描けない。」との想いから（この考えは河野扶の生涯を通して生きていた。）職業を変えられます。戦後、毎日新聞社が天皇制の論文を募集した時に一席になって破格の待遇で毎日新聞に迎えるという話があったそうです。その時は高校の教師だったが少し気持ちが傾いたと話しておられました。画学生のようなひたむきさを終世持ち続けた方で、私も自分の戒めのためにアトリエに河野さんの絵を一点かけています。非常に律儀な方でした。

### 「松井富民夫」について

温厚で穏やかな人柄で作品もそのようなしっとりとした作品を描いておられます。

### 「雨田 正」について

オーソドックスで透明水彩のお手本のような何のてらいも無い歯切れの良い絵です。県の高校野球に永いことタッチしておられたが、器用な方でスコアボードの字など全て自分で書いておられました。

### 「吉田 敏」について

雨田先生とは対照的に実におおらかな、骨太のどっしりとした不透明水彩の秀作を多く残しておられます。

### 「辻野精一」について

高鍋出身ということで親しくしていただき、私が高鍋町美術館長時代に代表作を三十五点寄贈していただきました。ミロにかなり魅かれたものもあるように感じられます。和紙などを併用し色彩も東洋風です。

### 「太佐豊春」について

昭和三十年代に美術雑誌「みづえ」か「アトリエ」に、抽象性の高い密度の濃い素晴らしい作品を発表しておられたのが印象に残ります。理論家で前衛的なシャープな作品を制作されます。

### 「仲矢勝好」について

物語性のある丹念な作品を作っておられたと思います。宮日展の無鑑査になられたのですが直後に他界されました。

### 「杉下昭明」について

野口徳次先生の甥ということで作品とともに印象に残った人物です。木の集団「林」を好んで題材に取り上げ、けれん味の無い風景作品を作り上げられました。

### 「道北昭介」について

高鍋町出身で、特に印象に残っているのは、旧制中学校の頃雨の降る中で雨に打たれながら風景画を油で描いておられた場面です。風土をテーマにした抽象作品を制作されました。

### 「上村次敏」について

昭和三十六年に私は武蔵野美術大学に内地留学をしたのですが、その年に武蔵野美大を卒業し、当時先進の展覧会として注目を集めたシエル美術展に三席入賞をして脚光を浴びました。植物を細密に描いて画面いっぱい埋めるような作風でした。ここからは、現存作家の方々を取り上げます。

### 「坂本正直」について

現役では、県内で最も優れた作家の一人だと思います。自分の信念を貫き通す、絶対に妥協しない心の強さを持った作家です。小さなこともおろそかにしない一つの例として、私が高鍋町立美術館長の時代にライフワークともいうべき三蔵法師シリーズ四十五点を一括寄贈受けました。その中の一点には、三蔵法師がゴビ砂漠を渡った日付が描いてあり、この日付を入れるのに現地に行き月の形を確認してこられたそうです。数あるエピソードの一つです。

### 「鳥原茂之」について

絵は洒落ていないと駄目だと常々私は思っているのですが、県内の作家で鳥原さんほど洒落た絵が描ける人はいません。作品は鳥原さんの生活そのもので、実にダンディです。

### 「川越彌録」について

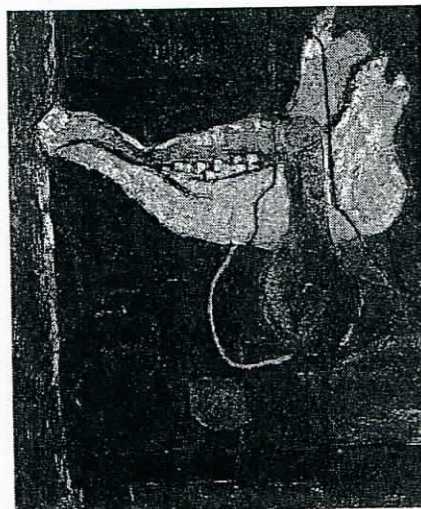
実に器用な方で抽象画だけでなく、しびい色彩の非常に達者な具象画を描かれます。

### 「彌勒祐徳」について

独特な表現法でご存知の方もいらっしゃると思います。画面を物で全面埋める方法で土俗的というかプリミティブな世界を構築しています。

### 「石井秀隣」について

ここからは、私自身の作品です。



牛骨のある静物40F

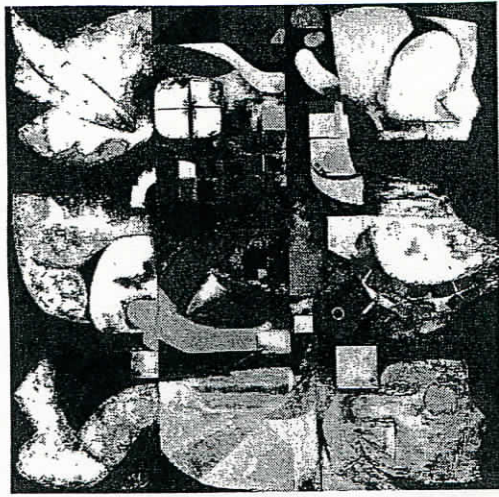
これは、二十二歳の時の作品で「牛骨のある静物」です。生命の尊さ、美しさ、その永遠性、それを破壊するものへの抵抗を表現しました。この頃は骨ばかりでしたが、その後登場する魚や鳥も私としては生命の象徴として表現しています。

「魚碑」は三十二歳の時の作品で「石になる鳥」シリーズの後に来るものです。飛べなくなつて、或いは飛ぶことを禁じられてじつとうずくまって石化してしまう鳥に託した心象風景です。

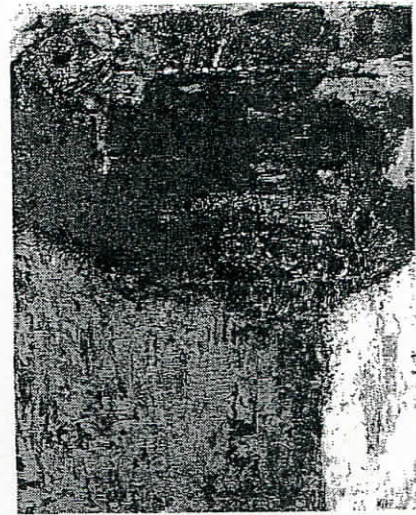


「証」平成十年、「証」平成十一年、六十四・六十五歳の作品でかなり抽象化されつつあります。私はカラーリストを自認していませんので色彩は鮮烈です。

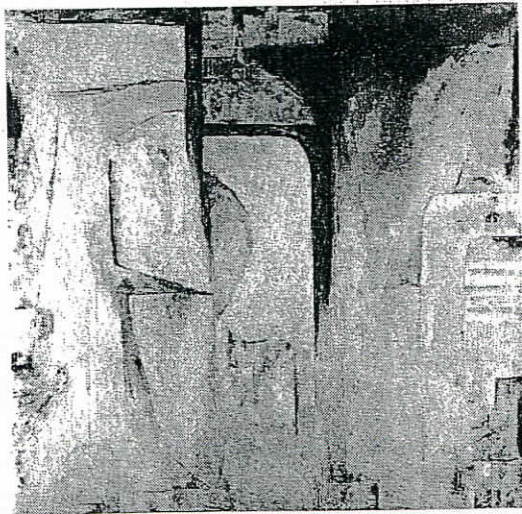
「響」平成十三年、「響」平成十四年、六十七・六十八歳の作品で形が大分不定形になりました。私は、絵を描き始めた時にはスタート時分青い絵ばかり描いていました。青の清潔感をだすために



証100S



魚碑50F



兆100S平成19年

形で白が多くなっています。

「遙」平成十八年「兆」平成十九年「兆」平成二十年と益々不定



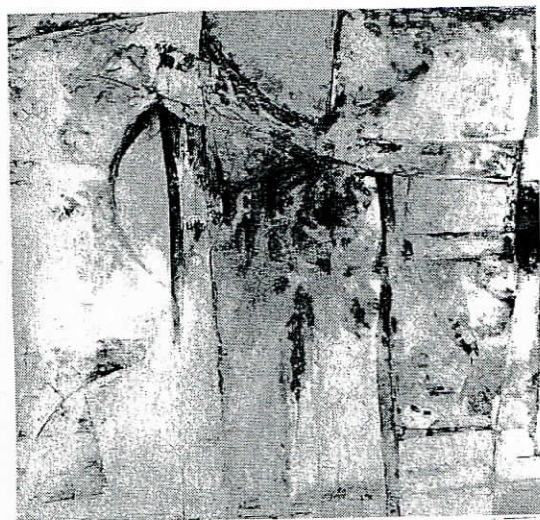
響100S

どうしても白の併用が必要なのですが、その頃従った「白」が表舞台に顔を出すようになりました。

私が解釈している「白」は、空白・無の「白」ではなくて全てのものを包含している充実した無限の「白」なのです。最近の私の作品から色が無くなったと言う人がいますが、私自身としては実に豊富な色彩をこの中に表現しているのです。これが現在の私の作品の特徴です。



兆100F平成19年



兆100S平成19年

参考資料

- (1) 「宮崎の洋画百年展」
- (2) 「石井秀隣画業五十年展」

宮崎県立美術館  
宮崎県立美術館